

# 児童養護施設版「生活安全感・安心感尺度」活用の介入プログラムの効果研究

松村 香<sup>1)</sup> 鈴木寛<sup>2)</sup> 宇津木孝正<sup>2)</sup>

1) 国際医療福祉大学小田原保健医療学部看護学科 2) 川崎市児童養護施設新日本学園

## 背景と目的

近年、児童養護施設に入所してくる子どもの半数以上は、虐待を受けた子どもであり、その養育は複雑で困難を極めている。日々の生活の中で、子どもの挑発行為、試し行動などから、子ども同士や職員と子どもとの間で人権侵害が引き起こされる場合があり<sup>1)</sup>、その予防と早期発見、ならびに安全で安心した生活環境の保障は重要な課題である。これまでの研究において、まずは、子どもが施設内で安全で安心して生活ができているかアセスメントすることが必要と考え、児童養護施設版「生活安全感・安心感尺度」を開発した<sup>2)</sup>。この尺度の活用によって、子どもが感じている安全感・安心感を数量的に把握することが可能となった。

また、過去の文献において、人権侵害を引き起こす要因の一つに、養育者の育児不安感との関連について述べられている<sup>3)</sup>。そこで今回、「尺度の活用を通じて、職員が、子どもの現状への理解を深めることによって、彼らの養育への不安感が軽減する」という仮説を基に、尺度の活用効果を、職員の意識変化に焦点を当てて検証することを目的とした。

## 研究方法

対象：(子ども) 神奈川、埼玉、茨城の各県にある5つの児童養護施設に入所中の6歳～18歳の子ども200名  
(職員) 子どもの調査を実施した5施設で働いている職員102名。

調査方法：(子ども) 児童養護施設の施設長の許可の下、同意が得られた子どもを対象に、調査を実施。  
(職員) 子どもの調査結果を基に、職員研修を実施。研修では、職員をいくつかのグループに分け、直接関わっている子どものデータを基にグループで話し合ってもらった。研修前、研修1か月後に、職員の育児不安感に軽減が見られるかどうか測定した。また同時に、職員の子どもの理解、意識の変化についても調査を行った。

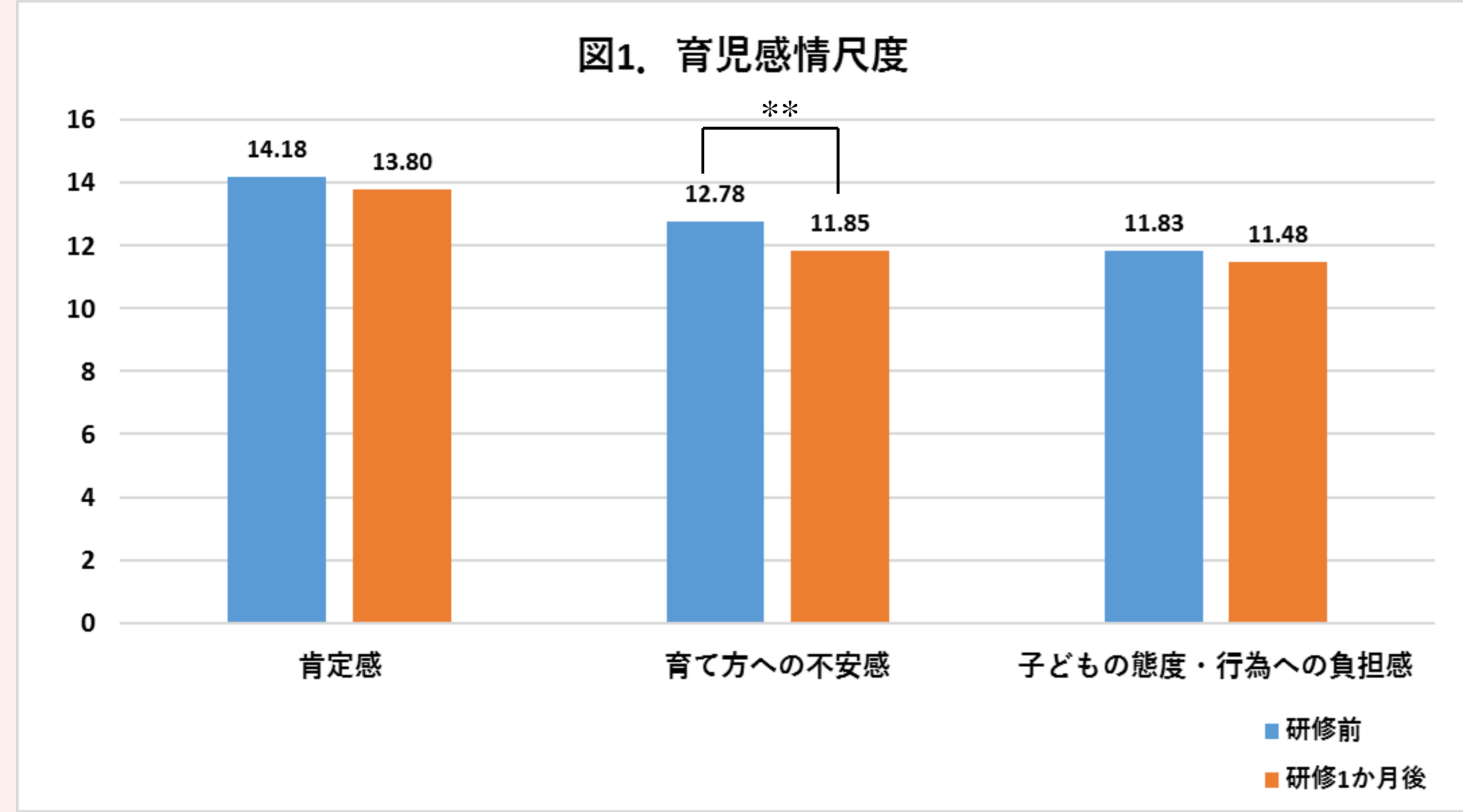
調査内容：(子ども) ①児童養護施設版「生活安全感・安心感尺度」 ②自尊感情測定尺度 ③子どもの抑うつ尺度  
(職員) ①育児感情測定尺度(荒牧が作成した尺度のうち、3つの下位尺度を児童養護施設版に改良したもの、著者承諾済)<sup>4)</sup>  
②職員の意識調査

研究期間：平成29年1月から6月まで。

分析方法：記述統計ならびに、育児感情尺度の研修前、研修1か月後の差の比較にt検定を行った。統計解析にはSPSS Ver 22.0を使用した。

※本研究は、国際医療福祉大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号: 15-Io-102, 17-Io-19)を得て実施した。

## 結果と考察



育児感情尺度 研修前・研修1か月後の比較 \*\* P < 0.01

- 育児感情尺度の3つの下位尺度のうち、「育児肯定感」や「子どもへの態度・行為への負担感」に関しては有意差は認められなかったが、「育て方への不安感」は、研修前に比べて研修1か月後が、1%水準の有意差で軽減していた。
- 職員研修直後の意識調査では、約96%の職員が、尺度の活用を学んだことで、子どもならびに集団への理解が深まったと答えていた。また、研修1か月後において、68.3%の職員が、子どもへの関わりに変化があり、83.5%の職員が、安全感・安心感に対する意識が高まったと答えていた。

表1. 職員研修直後のアンケート調査(n=98)

質問項目	とても そう思う n(%)	少し そう思う n(%)	どちらとも 言えない n(%)	あまり そう思わない n(%)	全く そう思わない n(%)
1 様々な尺度の活用を学んだことで、子どもへの理解が深まったと思いますか	69(70.4)	26(26.5)	3(3.1)	0(0.0)	0(0.0)
2 尺度の活用を学んだことで、子ども個人だけでなく、集団全体へと理解が深まったと思われますか	52(53.1)	42(42.9)	4(4.1)	0(0.0)	0(0.0)

表2. 職員研修1か月後のアンケート調査(n=79)

質問項目	とても そう思う n(%)	少し そう思う n(%)	どちらとも 言えない n(%)	あまり そう思わない n(%)	全く そう思わない n(%)
1 研修後、ご自分の子どもへの関わりに変化があったと思いますか	5(6.3)	49(62.0)	19(24.1)	5(6.3)	0(0.0)
2 職員研修によって、ご自分の安全感・安心感に対する意識は高まったと思いますか。	14(17.7)	52(65.8)	13(16.5)	0(0.0)	0(0.0)

## 結論

- 児童養護施設版「生活安全感・安心感尺度」の活用によって、職員の子どもの「育て方への不安感」に軽減が見られたことから、仮説は検証され、施設内の人権侵害の予防につながる事が分かった。
- 尺度の活用は、職員が、子どもや集団に対して理解を深めたり、安全感・安心感への意識の変化には効果的であった。
- 今後の課題は、尺度の活用によるその他の効果や、その効果の持続性についても明らかにしていくことが必要と考える。

## 文献

- 厚生労働省. 2013. 平成25年度における被措置児童虐待への各都道府県市の対応状況について
- 松村香, 宇津木孝正, 岡隆. 児童養護施設で暮らす子どもの生活安全感・安心感と精神的健康感との関係—「生活安全感・安心感尺度」の改良を通して—日本大学文理学部人文科学研究紀要. 2017, 94
- 望月由妃子, 田中笑子, 篠原亮次, 他. 養育者の育児不安感および育児環境と虐待との関連 - 保育園における研究 -. 日本公衆衛生学会誌. 第61巻, 第6号
- 荒牧美佐子. 育児感情測定尺度, 心理測定尺度集VI, 219-224

本研究は、報告すべき利益相反はない。